



サブスペシャリティで広がる未来

浅井 純

医療法人浅井皮膚科副院長 / 株式会社 DELPASSO 代表取締役 /
京都府立医科大学皮膚科学教室特任講師

私は現在、クリニックの副院長、大学病院の特任講師、そして株式会社の代表取締役の3足の草鞋を履き替えながら、日々の仕事に勤しんでいます。具体的には、クリニックでは日帰り局所麻酔手術と一般診療、大学病院では高難易度の全身麻酔手術、会社では医療関連の学会・研究会の座長・講師の受託や検査会社と契約しての病理報告書の作成といった、自分のサブスペシャリティをフルに活かした仕事をしています。どうしてこのような珍しい働き方になったのかというと、自分がやりたいことをやるにはどうしたらいいかを突き詰めた結果がこうなった、というところでしょうか。

私は2001年に京都府立医科大学を卒業し、そのまま母校の皮膚科学教室に入局しました。当時から、皮膚外科領域では国内有数の皮膚科であり、形成外科と進路を迷っていたくらい手術がしたかった私にとって、とても魅力的な環境でした。上司にも恵まれ、入局3年目には鼠径リンパ節郭清術を執刀させてもらえるようになり、4年目からは海外留学（米国ボストン、タフツ大学）に行ける幸運にも恵まれました。

帰国後、留学中のテーマだったマクロファージの研究で得た知識をもとに、大学病院で皮膚腫瘍と創傷治癒を専門分野として臨床と研究の両方に取り組んでいたところ、ある日突然、医局へ私宛に電話がかかってきました。電話をかけてこられたのは、当時、日本皮膚病理組織学会理事長だった鳥取大学皮膚科の山元 修先生でした。「浅井先生がマク

ロファージの専門家だと聞いたので、ぜひ日本皮膚科学会総会の教育講演で肉芽腫の皮膚病理の講演をお願いできないか」というお話で、それが私のサブスペシャリティに皮膚病理が追加されるきっかけとなったのです。

大学病院で働いている間は、診療と研究のほか、大学や教室の運営、後輩の教育指導など、仕事内容は多岐に渡りました。とても充実した日々を過ごしていましたが、50歳を前に、これからの人生は自分のやりたいことをもっと突き詰めていこうという思いが強くなり、2025年8月末で大学講師を退職するとともに、サブスペシャリティである皮膚外科と皮膚病理を存分に活かせる現在の状況に至り、充実した日々を過ごしています。

私の経験から後輩たちへ伝えたい言葉、それは、“この分野なら周りに頼られる”というサブスペシャリティを身につけましょう、ということです。自分の興味のある分野でも、教授から勧められた分野でも、なんでも構いません。

最近よく耳にする医療崩壊の言葉が現実味を帯びてきていますが、そこで生き残れるのは、“他人にない特長”をもつ皮膚科医なのです。